様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　２５日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19720108
研究課題名（和文）　名古屋方言におけるプロソディーと世代差に関する対照言語学的研究

研究課題名（英文）　A Cross Linguistic Study on Prosody in Nagoya Japanese

研究代表者 田中　真一（TANAKA SHIN' ICHI）
神戸女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：10331034

研究成果の概要（和文）：本研究では、名古屋方言の韻律構造（リズム・アクセント・イントネーションの構造）を明らかにすることを目標とし、一般言語学的観点からの調査および分析を行った。その結果として、アクセントおよびピッチに、種々の音韻構造が関与することを明らかにした。また、フィールドワーク調査による名古屋方言の録音の作業を通して、方言音声の記録という性格を持たせることを目標とした。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed prosodic structures of Nagoya dialect from linguistic point of view and reported that phonological structures affect pitch patterns of the language. And by recording accent and intonation patterns that native speakers of Nagoya dialect pronounce, it plays role of archives of the dialect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：音韻

１．研究開始当初の背景

(1) 名古屋方言は、東京方言や大阪、鹿児島方言等の諸方言、さらには英語などの言語に比べて、相対的に研究が質・量ともにけっして豊富ではない。また、伝統的な名古屋方言を話す話者も、質・量ともに徐々に変化してきている。とくに、上記を除く多くの方言や言語と同様に、伝統的な方言話者が徐々に減少しており、近い将来、この方言を特徴づける代表的な型が消えていくという危機に直面しているといえる。

(2) さらに、言語研究一般との関係から見れば、音声部門の一つである韻律（プロソディー）に焦点を当てた研究もそれほど多くない。その一方で、東京方言や英語をはじめとする諸言語においては、近年、理論・記述両面において、韻律研究は大きな成果が上がってい

るという現状がある。

２．研究の目的

(1) 本研究は、相対的に研究の少ないと思われる名古屋方言に焦点を当て、プロソディー（とくにアクセントとイントネーション）の記録を行い、それと同時に、東京方言および一般言語学的知見からの検討を加えた上で、同方言の個別性と他言語・方言との共通性を見いだすことを目的とする。具体的には、これまで諸言語の分析で確認されてきた知見から名古屋方言をとらえなすことによって、この方言に新たな光を当てるとともに、同方言の特徴と諸言語との間に見られる共通性を見出す。

(2) それと同時に、名古屋方言の分析から得られた知見をもとに、一般言語理論への貢献できる事象・現象を見出すことを、もう一つの目標とする。

３．研究の方法

(1) フィールドワーク調査、音声録音を通しての方言音声記録、および、データ解釈に関する音声学・音韻論的分析を行い、名古屋方言の理論・記述両面での一般化を試みる。定期的に名古屋市内でフィールドワーク調査を行い、同方言を話す話者を世代差に注意しながら、アクセントやイントネーション等に着目して、携帯用のデジタル録音機器を用いることによって音声の録音を行う。それをメモリーカード等の媒体を通してパソコンに取り込み、音響分析ソフトにかけることによって、ピッチの動態やパタンを観察する。それらの作業を通して、名古屋方言のアクセントおよびイントネーションに関する型を抽出する。上記のような一連の作業を通して、同方言の分析を行う。

(2) アクセントやイントネーションについて書かれた他方言、他言語における知見を整理することを通して、名古屋方言との比較・対象を行う。

４．研究成果

(1) 上記のような手順を経ることにより、以下のことが明らかになった。

まず、語の音節配列がアクセント型の決定に関与することが分かった。

名古屋方言は「**い**ちご」（苺）や「い**ち**ご」（一語）などのような「語頭１・２モーラの位置にアクセント核を持つ単語以外は、第２モーラの種類によって型が異なることが知られている（太字部分はアクセントのある位置、さらには高ピッチを表している）。具体的には、第２モーラが「よこはま」（横浜）などのように自立モーラの場合、語頭２モーラは「よこ**はま**」のように、「低低」の連続で、第３モーラからピッチの上昇が見られるのに対し、第２モーラが「**とうきょう**」（東京）などのように特殊モーラの場合は、「高高」の連続となることが知られている。東京方言と比べると、前者（第２モーラが自立モーラである単語）におけるピッチ上昇が１モーラ分後にずれるのに対し、後者（第２モーラが特殊モーラである単語）は同じパタンを示すということになる。

これに対し、本研究では「ごたんだ」（五反田）などのように、語頭３モーラ目が特殊モーラの場合、「ごた**んだ**」のような「低低高」ではなく、しばしば「ご**たんだ**」のように「低高高」となることを示し、それが音節という概念と関係すると解釈した。具体的には、多くの言語や方言と同じように、特殊モーラを含む重音節（Heavy syllable）が高ピッチを引き付ける（上記の例では、第３モーラの特殊モーラにより、それを含む音節全体が高いピッチを引きつける）ことが、じっさいのデータにより分かった。

そして、とくに若年話者においてこのような、音節構造に依拠した反応が高い割合で見られることが分かった（これに対し、後年話者は、相対的に前者、すなわち、「ごた**んだ**」のような、モーラにもとづく反応を示しやすいことが分かった）。

(2) また、第２モーラが促音の場合、東京方言に関する指摘（田中 2007, 2008）と同様、撥音や長音等の他の特殊モーラとは異なり、「がっ**こう**」（学校）などの例のように「低低高」というピッチ・パタンを示しやすいことが分かった。これは、促音を含む音節が重さを担いにくいためで、(1)で見た「よこ**はま**」の初頭音節「よ」と同様、軽音節としてふるまうことを示唆しており、このような意味において、名古屋方言においても、当為強方言と同様、促音の音声学的・音韻的な特殊性が確認された。

(3) 名古屋方言のアクセント型は、(1)の例で見たように、第２モーラが特殊モーラの場合は、「**しんぶん**」（新聞）などのように、東京方言と同じ「高高」のピッチ型を取り、反対に、そこ（第２モーラ）が自立モーラの場合は、今度は大阪方言との間に部分的にではあるは共通性が見られる（たとえば、「スト**ラ**イク」（ストライク）などのような例のピッチ・パタンが、これに相当し、両者は同じ方を持つ）。

しかしながら、名古屋方言において、東京方言や大阪方言と同じ型を取る単語であっ

ても、その音調が大きく異なり、とくに上昇のピッチの幅が名古屋方言において相対的に大きくなっており、それがこの方言を少なからず特徴づけているということが分かった。

(4) 名古屋方言については、従来から、とくに疑問詞疑問文のイントネーションの特徴が指摘されており、とくに、疑問詞（い**つ**、だ**れ**、な**に**、ど**こ**、ど**れ**）の持つアクセント型、すなわち、「低高」の特徴により、そこから始まる文の初頭が低いピッチで始まると同時に、文末も下降音調を示すことが知られている。

本研究の調査ではそれに加え、疑問詞第２モーラが特殊モーラである「**どう**」「**なん**」などの場合は高いピッチで始まり、それが先述の(1)とまったく同様のパタンであることが分かった。

(5) 名古屋方言は中立文であっても、他方言よりもピッチの幅が広く、それがしばしば他方言話者にとっては卓立発話のように聞こえることが分かった。したがって、それと同時に、卓立された部分はさらにピッチ幅が大きくなり、他方言話者にはしばしばその程度が過剰に聞こえ、それが時として、非難・不満というマイナスの情報のように聞こえることが分かった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 窪薗晴夫・工藤紀子・請川剛史・田中真一、外来語の促音、KLS、査読無、29号、2009、299-303.

② 田中真一　明治書院、言語の韻律構造と歌のリズム・メロディー、日本語学、査読無、42巻４号、2008、18-29.

③ 田中真一　開拓社、音韻・形態構造とアクセント：語種と語形成に着目して、音韻研究、査読有、11号、2008、131-140

④ 田中真一　ひつじ書房、音節量とソノリティー階層：外来語・複合語アクセントからの証拠、レキシコンフォーラム、査読有、３号、2007、33－66.

⑤ 田中真一　日本語のモーラ、音節、フットと単語長：野球声援のリズム結合と外来語アクセント、神戸言語学論叢、査読無、５号、2007、207-216.

⑥ 窪薗晴夫・清水泰行・儀利古幹雄・田中真一、アクセント研究の諸相、KLS、査読無、27号、2007、303-305.

〔学会発表〕（計６件）

① 田中真一　イタリア語の二重子音に対する日本語話者・学習者の促音知覚、促音国際ワークショップ、2009年12月20日、神戸大学.

② 田中真一　大阪方言外来語のアクセントと式について、日本言語学会第138回大会、2009年６月20日、明海大学.

③ 田中真一・窪薗晴夫、イタリア語の二重子音・単子音に対する促音知覚、日本音声学会、2008年9月29日、神田外国語大学.

④ 窪薗晴夫・工藤紀子・請川剛史・田中真一、外来語の促音、関西言語学会32回大会、2008年5月26日、大阪樟蔭女子大学.

⑤ 田中真一、大阪方言における漢語式保存と音韻・形態構造、第１回日本語研究国際学会パリ大会、2008年３月15日、パリ大学ディドロ校（パリ第７大学）.

⑥ 田中真一、イタリア語の重子音と促音形成：位置と種類に着目して、日本言語学会第134回大会、2007年6月19日、麗澤大学

〔図書〕（計２件）

① 影山太郎、高山知明、大島弘子、田中真一（ほか４名）くろしお出版、漢語の言語学、2010、257-275.

② 田中真一　くろしお出版、リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造、2008、250.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　真一（TANAKA SHIN’ICHI）
神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10331034

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：